

市民参加型ワークショップの手法に関する研究

木原一郎

(受付 2017年9月29日)

要 約

市民参加型のワークショップの方法を開発し、その効果を検証した。新開発手法とは、協創的ヒアリング手法とワークショップ中の発議を即時に専門家が具体性や実現可能性を検討しスケッチ等を起こしイメージを共有する手法を組み合わせたものである。

この手法を用いた結果、ワークショップによって必要とされていた分野のアイデアだけでなく、他分野も含めた派生アイデアも取得することができることが明らかとなった。またその出てきたアイデアはその後の進行の後戻りが少なく、ワークショップ時に共有したそのままの形で実現に至る可能性が高いことが明らかになった。

専門性の高い分野のワークショップにもかかわらず、専門性を有さない市民も参加することができ、また専門家の客観性を保つことでワークショップ中で発言されたアイデアがそのまま実現する可能性が高いことから、市民のプロジェクトへの参加意識とその後の継続的・能動的な関与の意識が高まることが明らかになった。

これらより今回開発した手法を Cultivated Image Share 法と命名し、今後もその可能性を検証する。

1. 研究概要

1-1. 研究の目的

近年、まちづくりに関する意識が高まり、様々な形の市民参加のプロセスが検討され実施されている。今後も地方創生の実現にむけて、これまで以上に行政が市民参加型のまちづくりを必要とし、市民の参加するプロセスが検討され、なんらかの形で事業の中にとり入れていく機会が増えると考えられる。

そのような状況の中、市民参加のまちづくりが実践されている都市として注目を集めているのがアメリカ西海岸オレゴン州ポートランドである。ポートランドではネイバーフッドと呼ばれる住民活動組織によるボトムアップのまちづくりが有名であるが、一方で大規模再開発などの行政によるトップダウンのまちづくりにおいても、都市計画や建築の専門ではない市民も参加し、その意見が実際の再開発プランに反映される。ポートランドの位置するオレゴン州では州政府により総合土地活用計画の策定において市民参加を義務付けていることもあるが、その市民参画の場は全く形骸化しておらず、活発な意見が交わされている。実際に大規模再開発において計画を立案するための事前調査や市民との意見交換の会には、日本での計画とは違い時間と費用を十分にかかるという。パブリックコメントなども日本で実施するものとは違い多数の意見が寄せられるという。実際に意見交換のワー

ワークショップにおいては、そこで用いられる手法は市民の意見を引き出すための手法ではなく、市民の意見の量をコントロールするための手法とも言える。

日本においてはどうかであろうか。ワークショップ、パブリックコメント、意見交換会、市民説明会など様々な形で実施されているものは、実施した証拠としてのみ存在し、市民参加が形骸化しているものも多数見られる。活発な発言がみられる会においても、対話にはなっておらず、一方的な質疑応答や発言が交わされる場も多い。実際に集められた意見が都市計画や建築の実施設計にどのように反映されたのか、または集められた意見との関連が全く見受けられない計画へ展開され参加した市民は疎外感を感じている場面も多数目撃してきた。特に建築や都市計画、まちづくりの場において、建築学や都市計画学などの専門性を有していない一般市民の意見は具体的な基本設計や実施設計には反映されず、参考意見にとどまるケースも多く見受けられた。また参加者から広く多くの意見というより、発言力のある一市民の意見がその場の総意として語られるケースも見受けられた。

そのような事例を踏まえ、今後市民参加のまちづくりが形骸化せず、多様性や包摂性に富んだ対話の場をつくり、そこで集まった市民の意見が高い専門性が必要とされる段階においても反映されるようなワークショップの方法論が必要であると考えます。

今回市民の参加意識を高めるために、新たに開発した手法を用いて取り組んだワークショップについて考察し、その手法の有効性を明らかにすることを目的とする。特に今回は先行研究において田坂¹⁾が定義した協創的ヒアリングと透視図や概念図のスケッチ等のイメージを共有するための建築家の技術を掛け合わせた手法を、考察する。

1-2. 研究の位置付け

これまでの研究においては、田中²⁾や高橋ら³⁾によるシャレットワークショップの研究がある。また平山ら⁴⁾による建築単体の基本計画を策定するプロセスに設計者、行政、市民が参画するワークショップを導入し運営するための手法を研究したものがある。それぞれの研究において、ワークショップ中の検討作業において配置ダイアグラムやボリューム検討、ゾーニング検討など一般市民も専門性の高い検討に参加しているが、対話の手法自体への言及はない。また本稿のように専門性を必要としない協創的ヒアリングと建築家の技術を掛け合わせた方法論の研究は少ない。

1-3. 研究の方法

本稿においては、対象とするワークショップでの協創的ヒアリングの手法と建築家のスケッチ自体を整理する。それぞれのワークショップにおいて、その成果がどのようにその後の段階において活かされたか、またその後どのように参加者が参画したかを整理し、開発した方法の効果を明らかにする。

2. 市民参加型ワークショップの概要

2-1. 手法の概要

本稿において開発した市民参加型のワークショップは協議事項に関して専門性を有さない市民の参加も促すために、ファシリテーターを設定し協創的ヒアリング手法を実施すると同時に、その中で市民が発案したアイデアの具体性・実現性について建築家を中心とした専門家が即座に検討し、コンセプトの概要を示したダイアグラム図や概念図、配置検討スケッチ、空間デザインを示したパーススケッチなどに書き起こし、その場で開示し共有するものである。協創的ヒアリングと組み合わせることにより、ワークショップを開催することが形骸することのないように配慮することができる。

ワークショップ中に発言されたアイデアは専門性を有しない市民から発言されたものであるため、また協創的ヒアリングの性質上、多岐にわたる。例えば建築のハードのデザインにおいても使い方などのソフト面のアイデアがでてくる場合もあり、その逆の場合も多く見られる。そのため、意図していた領域のアイデアだけでなく、これまで既に検討済みの項目に関する発展案が出てくる場合もあり、幅広くプロジェクト案を修正するためのアイデアを得ることできる可能性もある。その点も検証する。

2-2. 開催概要

表 1

開催名称	広島市西区地域拠点「こいけん2」改修プロジェクト		坂町ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップ			三原臨空中学校	
主催	広島市西区		坂町			三原臨空商工会	
開催主旨	コンセプト内装案立案		賑わい創出プラン策定			アクションプラン策定	
開催日	2015年12月	2015年12月	2016年6月	2016年8月	2016年10月	2017年7月	2017年8月
開催場所	広島修道大学	こいけん1	坂町役場			三原臨空商工会会議室	
新開発手法の実施	×	○	○	○	○	×	○

開発した手法で開催したワークショップは表1の通りである。

それぞれについて詳細とその後のプロジェクトの進行においてワークショップの成果がどのように反映されているかをまとめる。

3. 市民参加型ワークショップの詳細

3-1. 広島市西区地域拠点「こいけん2」改修プロジェクト

広島市西区が所有する空き店舗の一面を広島修道大学が借用し、そこを広島修道大学 人間環境学部 三浦教授とゼミ生が地域のまちづくり拠点や対話の場とするため己斐のまちかど研究室、略称「こいけん」としてリノベーションし整備した。その実績もあり、隣接する空き店舗もまちづくり拠点として活用することを本学に西区から依頼いただいた。その新しく空き店舗を活用した拠点「こいけん2」のコンセプト立案と内装案立案を市民も参加できる方法で行うこととし、特に内装案に関しては開発した手法を用いて実施した。

開発した手法で行ったワークショップの概要は以下のとおりである。1回目のワークショップはコンセプト立案のみを行い、開発した手法は用いなかった。

表2

ワークショップ名称	こいけん2内装案立案ワークショップ第2回
開催日	2015年12月22日
開催場所	こいけん（己斐のまちかど研究室）
目的	内装案立案
参加人数	5名
(内訳)	(広島修道大学学生4名, 対象店舗周辺在住者1名)
協創的ヒアリング手法	ワールドカフェ
専門家人数	2名
専門分野	建築設計



図1



図2



図3

広島修道大学には工学部建築学科等はないため、専門性を有さない市民とほぼ同等の知識である。ワールドカフェを2つのテーブルを用いて行い、そのテーブルごとに建築設計を専門とする建築家を配置し、テーブルごとに交わされる対話の内容を聞きながら（またはメモ用のテーブルクロスへのメモを閲覧しながら）、それをその場で検証し実現可能な案としてスケッチや簡易の図面に落とし込んだ。その後、最後にそのスケッチを全員の前で公

開し共有を行った。内装案だけでなく一連の店舗群に関する外装の仕上げやライトアップ、植栽計画など派生したアイデアも数多く見られた。その様子を図1に、その際の共有したイメージを図2に示す。

このワークショップで共有したイメージを基にした計画が進められ、実際に「こいけん2」(図3)として整備し、アイデアそのままの使用目的と仕上げの仕様となっている。実際に施工時にはワークショップ参加者も作業に参加している様子もみられた。

3-2. 坂町ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップ

地方創生案を作成するために、広島県安芸郡にある坂町が主催するベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップが開催された。その運営とコーディネートについて筆者が依頼を受け、実施したものである。坂町からの内容面での依頼としては、物品販売施設を計画中であり、最低限その建築物のデザインに関してはアイデアを取得できればというものであった。そこで三回実施したワークショップで開発した手法を用いた。その概要はそれぞれ以下のとおりである。

表 3

ワークショップ名称	ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップ第1回
開催日	2016年6月3日
開催場所	坂町 視聴覚室
目的	賑わいのヴィジョン策定
参加人数	13名
(内訳)	(広島修道大学学生2名, 町民9名, 銀行等関連企業2名)
協創的ヒアリング手法	ワールドカフェ
専門家人数	2名
専門分野	建築設計



図 4



図 5



図 6

第1回目のワークショップではワールドカフェのテーブルが4つ(予備1つ)に対して専門家は2名で、ワールドカフェの対話やメモを専門家が巡回しながら要素を拾いあげ、即座に共有するイメージに起こしていく方式をとった。

第1回目の目標は賑わいのヴィジョンを策定することとした。ワールドカフェの議題も

「最高の賑わい，最低の賑わい，最高のビーチ，最低のビーチ」，「私は〇〇が欲しい，〇〇がしたい」と依頼にあった物品販売施設に直結するものとはしなかった。しかしワークショップの結果，物品販売施設につながるアイデアもたくさん寄せられ，実際にその場で共有されたイメージも建物に関するものもあった。またベイサイドビーチ坂以外にも道路を挟んで対面の斜面地区も連動して活用すべきという派生案も発案され，イメージに起こされた。その様子を図4に，共有したイメージの一部を図5，6に示す。

第2回目の概要を以下に示す。

表4

ワークショップ名称	ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップ第2回
開催日	2016年8月3日
開催場所	坂町 視聴覚室
目的	賑わいのビジョン策定
参加人数	14名
(内訳)	(広島修道大学学生2名，町民10名，銀行等関連企業2名)
協創的ヒアリング手法	ワールドカフェ，ギャラリーツアー
専門家人数	3名
専門分野	建築設計



図7

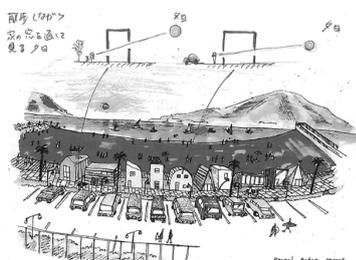


図8



図9

前回にて策定したビジョンを整理し，またそれに合わせて当日共有したスケッチを清書する形の資料を用意し，冒頭でそれを共有してから開始した。第2回目はファシリテーター役を専門家の一人が担い，ワールドカフェにて対話を進めながら，ファシリテーター役の専門家が2テーブル，後の二人はそれぞれのテーブルに一人ずつつき，対話やメモから要素を拾いあげ共有するイメージを起こしていく方式をとった。

ワールドカフェの議題は「10年先まで，5年先まで続く賑わいとは」，「夏以外の親子連れの賑わいとは」と，具体性の高いものとして修正案を引き出すことを意図した。

結果としてハード面とソフト面に関して，それぞれ修正案がでてくる形となった。また冒頭に提示したイメージの修正案だけでなく，その他の追加案や派生案も生まれ，即座に

共有されたイメージにも反映された。

冒頭に前回のイメージを振り返りながら共有したことで市民も目的やヴィジョンをより理解したことや専門家が直接テーブルに配置されたこともあり、アイデア発散より効率性をあげる建設的な対話も増えた。その様子を図7に、共有したイメージの一部を図8、9に示す。

第3回目の概要を以下に示す。

表5

ワークショップ名称	ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップ第3回
開催日	2016年10月12日
開催場所	坂町 視聴覚室
目的	賑わいヴィジョンからのアクションプランの策定
参加人数	12名
(内訳)	(広島修道大学学生2名, 町民8名, 銀行等関連企業2名)
協創的ヒアリング手法	フィッシュボウル, OST
専門家人数	2名
専門分野	建築設計



図10

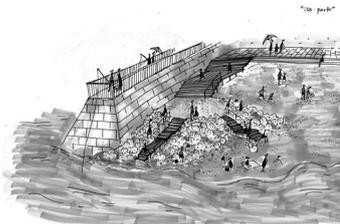


図11



図12

第3回目はまとめの回であり、広がったアイデアを収束させるため、主要メンバーが中央で話しているのを周りから客観的に観察するフィッシュボウルから始めた。その時は内容を共有するイメージには起こさず、その後のOST(分科会)の際に専門家も、特に専門性の高い「物販施設のデザイン」と「耕作放棄地の活用」に関する分科会に付き、即座に共有するイメージを起こしていった。専門家の付いたテーブルにおいては修正案だけでなく派生案も見られた。その様子を図10に、共有したイメージの一部を図11, 12に示す。

その後、このワークショップでまとめられた案が坂町長に答申され、地方創生案のベースとなった。また物品販売施設はアイデア通りの模型製作を通して関係者の了承を得て、国と県と坂町により協議がなされている。3回の連続したワークショップを建築設計のプロセスとして捉えるとイメージを共有しながら進めたためか、後戻りが少なく、広がり

見せながら順調に進んだと考えることができる。

加えて市民参加型のワークショップに参加したメンバーからこのワークショップのなかで培われたつながりが終了と同時になくなってしまっは意味がないと申し出があり、日頃から議論しベイサイドビーチ坂の賑わいを創出するための団体を設立した。

3-3. 三原臨空商工会 三原臨空大学校

三原臨空商工会が開催する三原臨空大学校を実施した。「糸口をつかもう」、「未来を描こう」という題目で、実際になにか活動を起こしてみることを念頭に入れたワークショップを開発した方法で実施した。第1回目のワークショップはコンセプト立案のみを行い、開発した手法は用いなかった。第2回目の概要は以下のとおりである。

コンセプトから、それを具体的に実現するためという方針で「飲み合いタクシー」「臨空ベース」「仕事バー」「新規案」の四つにわかれ協議した。専門家3名は「新規案」以外のテーブルにそれぞれつき、一緒になって協議をおこないながら即座に共有するイメージを起こしていった。

表6

ワークショップ名称	三原臨空大学校 2時間目
開催日	2017年8月23日
開催場所	三原臨空商工会 会議室
目的	アクションプランの策定
参加人数	21名
(内訳)	(広島修道大学学生1名, 商工会員20名)
協創的ヒアリング手法	OST
専門家人数	3名
専門分野	建築設計



図13



図14

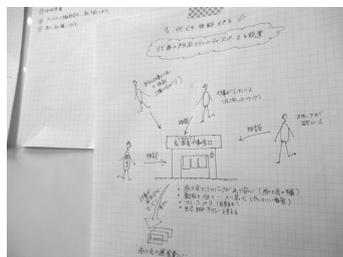


図15

協議は多岐にわたり、専門家の専門領域を超えたロゴマークのデザインや法的な仕組みづくりの派生案の協議も行われた。専門家もその場で出てきた専門領域内外に渡たる案のイメージをおこし、または概念図をつくりイメージを共有した。その様子を図13に、共有

したイメージの一部を図14, 15に示す。

ワークショップ後は実践に向けて形が模索されているが、その後うまく進んでいるとは言い難い。

4. 終わりに

4-1. まとめ

ここまで明らかにになったことをまとめると表7の通りである。建築設計のプロセスと照らし合わせてみても議論の活性度は高いにもかかわらず、合意の度合いが高く後戻りも少なく抑えられ順調にすすめることができる可能性が高いことが明らかになった。これらを踏まえて考察する。

表7

名称	こいけん2	ベイサイドビーチ坂賑わい創出			臨空大学校
	2回目	1回目	2回目	3回目	2回目
専門家の視点	客観（各机）	客観（巡回）	客観, 主観	主観（各机）	主観（各机）
アイデア	発散	発散	修正	収束	発散
派生	有	有	有	有	有
その後	案通り実現	案通り進行中, 市民団体設立			停滞

4-2. 考察

この手法を用いた結果、仮説に立てていたとおりのワークショップによって必要とされていたアイデアの分野より、他分野も含めた広い幅の派生アイデアも取得することができることが明らかとなった。協創的ヒアリングを掛け合わせることで、専門家の単一分野だけでは考えが及ばない領域にも広がっていったと考えられる。

一連のワークショップは建築設計のプロセスと照らし合わせて考えると、進行の後戻りが少ない状態で実現に至る可能性が高いことが明らかになった。後戻りないことが良いことではなく、また時間が短縮されることが良いことというわけではなく、十分に合意を得られた上に、それに応じた対話の時間が比較的短くても可能であるということである。これはイメージを共有しながら立案しているためであると考えられる。参加者自身の発議が反映されたことに対して納得しながらイメージを受け入れ進行していくため、当事者意識も高まっていると考えられる。

また専門性の高い分野のワークショップにもかかわらず、専門性を有さない市民も当事者意識が高まるため、その後の継続的・能動的な関与の意識が高まることが明らかになった。これは「こいけん2」における施工の作業にワークショップ参加者も協力していたこと、ベイサイドビーチ坂賑わい創出ワークショップにおいて、事後に参加者を中心とした

市民団体が設立されたことが例である。

アイデアを発散・収束するかに応じて、専門家の立ち位置（主観・客観）を変えることが重要であると考えられる。実現に向かって動いていることを当事者意識の向上と捉えた場合、特にアイデア発散時に専門家の客観性が必要であると考えられる。場自体は共有しているため、部外者のような客観性ではなく、臨場感をともなった客観性を保つことにより、専門性を有さない市民が自身の発言が形になっていくことを実感するため、主観性を持って専門家が参加した場合よりも、市民の当事者意識が高まっていくと考えられる。また主観性をもって専門家が議論に入ると市民から効率性を重視した対話が増えることから客観性の重要さが伺える。この客観性は、市民参加型のワークショップでの一つの課題である質の担保の点において、専門性を有しない市民のもつ自由なアイデアと専門家のもつ質を担保する技術や知識をつなぐ重要な要素となるのではないかと考える。今後の課題として、専門家の立ち位置（主観・客観）に関して検証していく必要がある。

今回開発した一連のワークショップの手法は、市民の自由なアイデアを専門家が洗練または掘り起こしたイメージを共有するものであり、また参加市民の参加意識を醸成することができることが明らかになったことから、Cultivated Image Share 法と命名し、今後引き続き有効性を検証していく。

参 考 論 文

- 1) 田坂逸朗, 「地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング手法の研究 —— 未来創造のためのファシリテーション ——」, 広島修大論集第55巻第1号, pp. 39-52
- 2) 田中貴弘, 「都市全域の緑地計画ビジョン策定のための住民参加型シャレットの技法 —— 「オープンスペース・シアトル2100」に着目して ——」, (社) 日本都市計画学会 都市計画論文集 No. 43-3, pp. 571-576, 2008年
- 3) 高橋 潤, 小林剛士, 小林正美, 「実践教育としてのまちづくりシャレットワークショップの研究 —— 学生参加のシャレットワークショップを事例として ——」, 日本建築学会技術報告集 第16巻 第33号, pp. 711-716, 2010年
- 4) 平山文則, 趙 世晨, 「地域コミュニティ施設計画・設計におけるワークショップ手法に関する研究」, 日本建築学会技術報告集 第20巻 第46号, pp. 1079-1084, 2014年

図 版 出 典

図3 筆者撮影

図10 坂町役場撮影

その他図 田坂逸朗撮影